

しづかなのけもの

くにむらせいじ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

コミュニケーションが苦手な「なみみ」は、早朝の餌作り担当。それは、地味できつい、ジャパリパークの裏方仕事だった。

ある日彼女は、調理場に侵入したサーバルを発見した。

好意的なサーバルに対し、友達になることを拒否するなみみ。けものフレンズから大きく逸脱しています。

百合的な要素は薄く、「ガールズラブ」のタグは不要な内容です。でも、ちょっとといちやつく場面があるので念のため付けました。

全4話+1話です。

目 次

第1話 「イレギュラーなルー・ティン」	39
第2話 「防御の刺突」	28
第3話 「情けは己がため」	18
第4話 「残酷なひざまくら」	8
あとがき・設定	1

第1話 「イレギュラーなルーテイン」

わたしは、『なみみ』。

とつてもヒマだから、昔の記憶を開いてみよう。ちよつと前に編集したガラクタが、奥の奥にいっぱい詰まっていたはず。偽物の記憶……嘘と間違だと矛盾だらけの思い出だ。

時折、暗くて退屈な日常がキラキラ輝く瞬間があつた。短い人生の中の、数瞬……。

まだ、ジャパリパークがヒトと共にあつた頃。思い出すと胸が苦しくなる、平穏な時代。

し　す　か　な　の　け　も　の

ジャパリパークの西寄り、森の中にある、『アンイン第4炊事場』。お堅い名前だからか、飼育員の間では『妖怪キッチン』って呼ばれている。地元の伝説にちなむ、親しみを込めたあだ名だ。

『地元の伝説』とは、『森の奥深くに、妖怪が絵物語を描く小屋があり、入ると、その人の人生を絵物語のモデルにされてしまう』という話です。

華やかなレストランが併設されている第3炊事場とは違い、ここには閉鎖された大食堂が残るのみ。かつてはお客様で賑わっていたけど、今は『アニマルガールではない動物』向けのごはん作りがメインだ。

早朝の、まだ暗い時間に、わたしの一日は始まる。

軽く朝食を食べて、作業服を着て寮を出て、隣の建物の調理場へ向

かう。

調理場ではエプロンを着ける。工場みたいでかわいくない、厚手の白い大きなエプロンだ。

壁にかかっているのは、『普通の時計』と『ジャパリパーク標準時の時計』

ジャパリパーク標準時の時計は、盤面が虹色の二重円で、数字も目盛りも無い。これの読み方を知っているのは、古参の飼育員くらいだろう。この時計の読み方は、ちゃんと教本に載っているのですが、研修では覚えることが多すぎて、サラッと流されてしまうのです。なみみさんは、古参と呼べるほどのベテランではありませんが、読み方を先輩に教わりました。

動物たちの生活リズムをベースにして、季節や気候に合わせて盤面や針の動きが変化する、生きている時計。ヒトは、目盛りの上を一定の速さで回る時計に慣れすぎていて、変動する表示に馴染めなかつたから、今ではあまり見かけない。職員の勤怠管理も普通の時計が基準だ。

でも、わたしはパーク標準時が好き。とつても心地いい時間だから。

『普通の時計』の5時頃に、おんぼろのトラックがやってくる。ドライバーのおじさんと一緒に、段ボール箱に入った大量の食材を降ろし、ウォークイン冷蔵庫へ詰め込む。わたしは台車に乗せて運ぶけど、ドライバーさんは台車を使わない。『手で運んだ方が速い』んだつて。 トラックから冷蔵庫までは近いので、いちいち台車に乗せるより、持つて運んだ方が早いのです。もうひとり欲しいところだけど、早番ができる人がいないんだ。

このドライバーさんは長い付き合いだ。言葉足らずで会話が苦手なわたしのことを理解してくれていて、何もしやべらなくとも作業が進む。

ドライバーさんは、手早く仕事を終えて去つて行く。あの人は、港に荷揚げされた資材をトラックに積み、各所を回つて資材を届け、不要品を回収する。だから、わたしそれより早起きで力持ち。寡黙なおじさ

んだけど、ちよつと格好いいなつて思う。 集配は、早朝、昼、午後、夕方の4便あります。毎日このスケジュールなのではなく、便が少ない日もあります。『アンイン第4炊事場』は、比較的早い時間に届く場所です。

わたしは、タブレット端末に送られて来るオーダーをもとに、野菜、お肉、お魚、栄養剤などを準備していく。動物によつては毒になる食材もある。稀にオーダー内容にミスがあるから、それを指摘できる知識も必要。栄養士……というより、薬剤師みたいな仕事なんだ。飼育員になるために学んだことは、ちゃんと役立つている。

アニマルガールはヒトと同じものが食べられるし、各個体に合わせて栄養素が調整できるジャパリまんも開発中。だけど、『アニマルガールではない動物』には、本来の食べ物が必要なんだ。 ジャパリパークは自然環境を完璧に再現しているように見えますが、あくまで動物園であり、本物の食物連鎖までは再現できていません。ですから、ヒトの助けが無いと動物たちは飢えて死んでしまう、あるいは、増えすぎて食料を食べ尽くしてしまうのです。

調理器具の準備と下ごしらえが、わたしのメインの仕事。動物たちはものすごい偏食で、信じられない量を食べる。材料をカットして、フードプロセッサーにかけるだけでも大変だ。

この大きな野菜スライサーが難物だ。刃の切れ味が悪いうえに部品がガタガタで、野菜を上手くセットしないと引っかかつて止まっちゃう。交換刃は高いから買つてくれないし、機械ごと買い替えてほしい……なんて言えないよね……。

日が昇る頃に、電動スクーターの音が聞こえて、マグ先輩がやつてくる。先輩というより師匠みたいな人だ。『マグ先輩』は、アンイン第4炊事場のヌシ的なベテラン女性飼育員です。 とつても心強いけど、朝が弱いんだよね……。ふたりで協力して、重労働の下ごしらえを終えたら、ガスコンロやオーブンやフライヤーを使う調理が始まること……とは言つても、生で食べる動物が多いのだけれど。調理と同時に、各方面への仕分け作業もする。

リングが余つてゐるから、内緒でレツサーパンダ舎に送ろう。こういうイタズラは、わたしのささやかな楽しみ。

程なくして、近隣で働く飼育員たちが、動物たちのごはんを受け取りに来る。トラックは時間が決まっていて本数が少ないので、飼育員達が直接受け取に来るのです。業務用バン・使っていらないバス・荷車などで運びます。パークには数10か所の炊事場（あるいは食品工場）があり、それぞれ担当する範囲が決まっている……という設定です。この、“おつかい”は、主に新人の仕事だ。その初々しい姿を見て、 “わたし、ちょっと怖がられてるかな？” なんて思う。

昼前に、遅番のふたりがやつてきて、4人体制になる。昼はバラバラに食事。昼間はイートインのお客さんが来るから結構忙しい。表向きは『食堂は閉鎖された』のですが、実際にはパークの従業員が食事に来ます。たまにアニマルガールのお客さんも来ます。パークの外から来たお客様は、この場所を知らないので滅多に訪れます。

妖怪キッチンには、かわいい制服なんてないし、わたしも着たいとは思わない。そして、料理はどれも大盛り。肉体労働をする作業員向けの、実用性一点張りな調理場だ。

マグ先輩 「うちはレストランじゃねえ。うまいメシで力をつけてもらえばいいのさ」

この先輩も格好いい。めっちゃくちゃ怖いひとだけど。

昼を過ぎると、わたしは食材の残りをチエツクして、足りないものを発注する。そして、業務日報を書いて寮に戻る。夕食を食べてお風呂に入り、早めに寝て、明日に備える。

これがわたしの一日。シフトは時々変わるけど、このパターンが多いね。

大抵、ぐつたり疲れてるから、すぐに眠れる。この仕事に休みはない。

もうひとり欲しい……なんて贅沢は言えない。パークはどこも人手不足だし、優秀な子はセントラルに行っちゃうから。

ジャパリパークの職員が少ないので、悲しい理由がある。

お客様が減っているんだ。アニマルガールは珍しくなくなつたし、アトラクションも飽きられている。寄付も減つているし補助金は増えない。もともと莫大な運営費がかかるのに、老朽化した施設の修繕 特殊な設計の施設（建物が動物の形をしているとか）が多いため、普通の建物より修繕費が大きいです。諸般の事情により崩壊した建物もあります。新しいアトラクション、ガイドロボットの開発、セルリアン対策などで、パークの運営費は膨らむ一方。

この前、入園料の引き上げが決まった。頑なに値上げを拒んできた園長がついに折れたんだ。『パークをお金持ちの娯楽施設にしたくない』って言つていたのに……。でも、閉園になつたら、たくさんの動物が行き場を失う。みんな動物もパークも大好きだから、意見がぶつかるんだよね。

いちばん大きい経費は人件費。何人の先輩が辞めて行つた。『私が知つてゐる。パークじゃなくなつちゃつた』って言つて、寂しそうだつた。後輩も辞めて行つた。『仕事がつらい』って。せつかくパークに就職したのに動物とふれ合えないから、嫌になつちゃつたんだろうね。なら、辞めて正解だよ。お客様として遊びに来ればいい。

ガイドロボットの性能が上がれば仕事は楽になるだろう。でもそうなると、もつとヒトが減る。特に、わたしたちみたいな裏方のきつい仕事は。

今は、この仕事を誇りに思っている。……そのうち本物の妖怪になっちゃうね。わたし。

キリツと冷えた秋の早朝。まだ真っ暗な時間。

わたしは、いつものように調理場に一番乗り……と思つたけれど……。

調理場の中から、カリカリカリカリ、ガリガリ……と音がする。まあ多分、怖いおばけじゃなくて、食いしんぼうな妖怪^{フレンズ}だろう。鍵をかけないと、貯蔵していた食材が減つてしまふ怪奇現象が起きるのです。入り口の鍵はかかつていていたけど、高い位置にある換気用の窓が20cmほど開いていた。遅番のふたりが施錠を忘れたみたい。あの窓はセキュリティロックがかからないんだ。高い窓の隙間から侵入できる子か……誰だろう？

わたしは調理場に入り、明かりをつけた。

なみみ 「…………かりかりしちゃだめ…………」

小さくて、ぼそぼそした声が出た。これじゃ、わたしの方がおばけだね……。

ネコの子 「わわ！ ゴメンなさい！」

調理場にいたのは、大きなネコ……サーバルのアニマルガールだった。

彼女は、シンクのわきに立てかけてあつた特大のまな板で爪とぎをしていた。外が寒いから入つちゃったのかな？

この子はいろいろと有名だ。自覚は無さそうだけど、とつても人気がある。

サーバル 「ここにちは！ ……じやなくて、こんばんは、かな？」みんなに好かれる、キラキラした輝きを持つた子だ。……わたしとは真逆だね……。

なみみ 「…………おはよう…………」

なんて暗い声なの！ダメだよわたし！挨拶はもつと明るく大きな声で言わなきや！

サーバル 「おはよう！ なみみさん！ きょうも早いね！」

サーバルの明るい笑顔。……まぶしすぎて、つらい。どうやつたらこんなふうに笑えるの？

わたしは、醜悪な笑顔を見られるのが恥ずかしくて、我慢しちゃうのに……。なみみさんは、感情を表に出さないように無理をしているのです。特に、笑顔と泣き顔は見られてはいけないのです。『感情を表に出すのは恥』という感覚は、理解しがたいと感じる人が多そうです。でも共感する人もいるのではないかと思います。

今日は集配のトラックが来ない日だ。

なみみ 「……ジャパマン、食べる？」 この『ジャパリマンじゅう』は、温泉まんじゅうみたいなものです。中華まんタイプの『ジャパリマン』とは違います。

何の気まぐれか、わたしは、そんなことを言つてしまつた。

つづく

第2話 「防御の刺突」

サーバル 「静かにしてると、いろんな音が聞こえるね」
なみみ 「…………」

わたしは……時計の音が気になる。

サーバル 「ほら……葉っぱの音、虫の声。……むこうに鳥の子がいるよ」

サーバルが窓の外を見た。この子には、目に見えるように聞こえるのだろう。

なみみ 「…………？」

わたしは、窓の外を見た。かすかに空が白み始めていて、木々のシリエットが見えた。

なみみ 「…………見えない…………」

わたしはいつも通り、動物たちの食事の下ごしらえを始めた。

サーバル 「すつゞーい!! なにこれ! お野菜がバラバラだよー！」

サーバルが、例のおんぼろスライサーを見て目を輝かせた。
そして機械に触れた……

……カバーがベコツと内側にズレて、ガリガリっと嫌な音がした。

サーバル 「んみや?」

スライサーが止まり、エラーの赤ランプが点灯した。見慣れた緊急停止だ。

サーバル 「うわー!! ゴメンナさい!! わたしのせいかも!!」

サーバルがあわてた。カバーが外れてる所さわっちゃったかな?

なみみ 「…………だいじょうぶ…………いつもの…………」

スライサーのカバーを開けて見ると、回転刃が外れていた。

わたしは、刃を付け直そうとしたが、ボロつと取れてしまった。よ

く見ると取り付け部分が折れていた。これ、この前みたいに応急処置できるレベルじゃない。マグ先輩でも直せないかも。

なみみ

「間に合わない……」

手作業では、先輩とふたりでやつても厳しいね……。

サーバル 「わたしにやらせて！ 」 こういうの得意だから！」

……焦つて混乱したわたしは、あろうことか、ネコの手を借りてしまつた。

サーバル 「みみみつ！ ……ねむい……ふみやみやみや！」

サーバルは、半分寝ながら、野菜を投げ上げ、爪でカツトしていく。速すぎて、どう切つているのか見えなかつた。 サーバル

ちゃんは、『縦スライス・水平90°回転・45°ダブルクロスカツト（ショートVer.）』という、比較的（フレンズ基準で）難度が低い技を、ヒトには視認できないスピードで無意識に行つています。爪とぎをしたばかりなので切れ味抜群です。爪の先端は音速を超えるので、繩跳びの三重跳びのような音がします。

なみみ 「怪我するよ……」

ああ……細かく切りすぎて飛び散つてる……片付けが大変だ……。

だめ！ キヤベツは古い方から使つてよ！

何も仕事を知らない子が手伝うと、かえつて やることが増えちゃうんだよね……。

なみみ 「えつと……」

わたしは、人に指示を出すのも教えるのもすごく苦手だから、ひとりでやつた方が速くて楽なんだ。でも、善意で手伝ってくれているのに、邪魔者扱いするわけにいかないよね……。

なみみ

「……このくらいで……」

わたしはキヤベツを包丁で切つて見せた。

野菜のカットだけに専念してもらおう。いろいろ教えると、わたくしの方が混乱しちゃうから。

サーバル「みやみやっ!! こんなかんじかな?」

サーバルは、言葉足らずなわたしの意図をくんでくれた。じんわり嬉しくなった。

ふたりで、プラスチック製のバケツに、大量の刻んだ野菜を入れた。

なみみ 「……これで、おしまい」

やることは、まだまだたくさんあるのだけれど。

サーバル「おかたづけ、やらせて!」

サーバルが元気に手を上げた。

困つたな……正直、仕事の邪魔なんだよ。

……ああ……何考えてるのわたし!! 最低だよっ!! 手伝つてもらつておいて!!

最低な考え方から目をそらすと、『ジャパリパーク標準時』の時計が『朝はじめ』になつていた。

なみみ 「……もういいから……よい子は寝る時間」

この子は夜行性だからね。

屋外が明るくなり、"明け方のパーク" から "朝のパーク" へと変わつていった。

鳥の声は聞こえるけれど、電動スクーターの音は聞こえない。マグ先輩、また寝坊しちゃつたのかも。

サーバル「きょうは、なみみさんに会えてよかつたよ」
サーバルの明るい声。
なみみ 「へ?」

わたしは耳を疑つた。

サーバル 「なみみさん、あしたも会おうね！ わたし、この時間ひとりだから、さみしくて」

サーバルは、につこりと、少し恥ずかしそうに笑つた。

わたしの中に、理解不能な熱がわいてきて、心臓がキューッとなつた。

この子は、わたしがいると さみしくない、つてこと？ そんなことありえないよ……。

普通嫌がるでしょ？ わたしがいたら。ここまで卑下力が高い（そんな言葉は無い）人はなかなかいないと思います。なみみさんは、嫌われて疎まれるのが普通なので、卑下している自覚すらあります。なみみさんは、意外と自己肯定感……というよりプライドが高いので、嫌われても構わない、今ままの自分で良い、と思っているのです。

でも、この子が嘘をつくとは思えない。

サーバルが、不思議そうな顔をして、わたしの胸を見た……じやなくて耳を向けた。

サーバル 「どうしたの？ ドキドキしてるよ？」

耳が良すぎだよこの子……恥ずかしい……。

なみみ 「…………こんなふうに……求められたこと、無かつた

……」

サーバルが、きよとんとした。

サーバル 「どういうこと？」

そのままの意味だよ。

なみみ 「…………友達いないから、わたし」

今も昔も、本当にひとりもいないんだ。『顔見知り』ならたくさんいるけどね。

サーバル 「そうなんだ……ええ！ えつと……そ、そんなことないでしょ！」

サーバルは驚いて動搖していた。 サーバルちゃんは、驚かずに入受け止める気もします。ひとりで過ごすのが好きなフレンズもいる

でしようし。

なみみ 「……そういう子がいるの……ヒトの世界では」

大抵、クラスにひとりくらいいるね。 こういう子は、会話が苦手で黙つても、周囲の会話をしつかりと聞いていて、いろいろ考えているようです。もちろん個人差はあるでしようけど。

サーバル 「でも、あなたと おともだちになりたい子、いっぱいいたでしょ？」

なみみ 「……近づいてくるひとはいたけど、わたしを、いじつてるだけだった。

変なやつがいる、つて」

サーバル 「それはかんちがいだよ！ その子、あなたとなかよくしたかつたんだよ！」

サーバルは、強めの口調で言った。

確かに、わたしと仲良くなろうとした子はいた。 いたけど……からかい半分にしか見えなかつたよ。『あなた、ひとりでかわいそうだね。これで遊ばない？』 つて、笑顔で ねこじやらしを振られて……。わたしは冷たく無視したけど、内心、頭にきていたんだ。『バカにしないで！ わたし、あなたのペットじゃないんだよ！ 『かわいそう』じゃないんだよ！ しゃべらなくても怒るんだよ！』 つて。

これは経験がある人しか分からぬ気持ちでしよう。好意であつても、惨めな気持ちになつて怒りが沸くんですよ。変な同情は自尊心をズタズタにします。 “わたし不幸な弱者を助けて良いことして

る！” そんなふうに助けられたら、怒りや痛みを感じます。それが、リアルなクーデレ（重度のコミュ障）の気持ちです。障害者も同じことを感じるようです。受ける側は、こういう気持ちを表に出せないんですよ。特に、なみみさんのような、『サイレントマイノリティ』は。

今思えば矛盾している話だね。 いちいち怒つていたら心が持たないよ。

なみみ

「……なんにもしゃべらない。話しかけても無視。

そんな子と、仲良くなりたいなんて思わない」

最初は、無視じやなかつたんだけどね。

サーバル 「どうしてしゃべらなかつたの？」

わたしが会話が苦手な理由は、いくつもあつて複雑だ。中でも、根っこにあるものは……

なみみ 「わたしは、言葉をうまく組み立てられなかつたの」

考えすぎて、声に出すまでに時間がかかつてしまふ。それが “こいつ無視してる” って誤解されたんだ。そして、いろんなことが原因でいじめられて、意地になつて本当に無視して……。

これは、“ニワトリが先か卵が先か” なんだ。黙るのが先か、会話が苦手になるのが先か …… いずれにせよ、わたしは悪循環に陥つていたんだ。

どこが始まりかな……幼稚園の頃、先生に『静かにしなさい』と言われたのを愚直に守り続けて …… って、なにその理由？ 理屈は分けるけど極端すぎるよ！ 『静かにしなさい』が、トリガーやなつた可能性もあります。子供の頃の些細な出来事が、後の人生に大きく影響することもあるのです。

……説明が難しいね……簡単に言うなら……： なみみさんの頭の中はいつもこんな感じで「ちやー」ちやしているので、会話の流れについて行けなくなるのです。

なみみ 「めんどくさくて黙つてたら……じゃべれなくなつちゃつた」

こうやつて普通に会話ができるのは、ずいぶん進歩したんだよ。自分で驚くくらい。

サーバル 「つらかつたんだね……」

違う。信じてくれないとと思うけど……

なみみ 「わたしは、ひとりが当たり前だから、つらくない」

『失う』よりも『初めから無い』方が痛みは少ないですからね。

これは強がりではなく本音なんだ。普通は、悲しいとか寂しいとか感じるらしいけど……わたしは多分、「普通」じゃないんだろうな……。 なみみさんは、“寂しい” という感情が分からぬいのです（理屈は知つているが、感覚は分からぬい）。常に寂しい状態

なので。

サーバル 「わたしがおともだちになるよ！ たのしいこと教えてあげる！」

サーバルは屈託なく笑った。

この子、いい子すぎてイライラする。天然モノの、まっすぐで、しなやかな芯がある。それはわたしには無いものだ。しかも……怖いくらいやさしい。

この子とわたしじゃ釣り合わないよ。わたしと友達になるなんて、この子がかわいそうだよ。

卑下力が……。どう言えば良い？ 突き放して、あきらめさせなきや。

なみみ 「……もつと早く出会えていたら……でも、この歳じや手遅れ」 なみみさんは年齢不詳です。20代中頃～30代初めと思われます。

サーバル 「おともだちに歳は関係ないよ！」 年齢差のある友達は、世代間のギャップや上下関係のモヤモヤがありそうです。でも、それが楽しいのです。あと、サーバルちゃんも年齢不詳です。ダメだ……粘る気だこの子……。

ここは思い切って、ストレートに言おう。

なみみ 「……友達は、いらない」

サーバル 「え……」

サーバルの笑顔が消えた。

胸がズキっと痛かつた。

だから、わたしは『恋人も、子供もいらない』 とまでは言えなかつた。

なみみ 「あきらめたら、ラクになつたの」

あきらめると本当に楽なんだ。わたしは、毎日おいしいごはんここで言う『おいしいごはん』は、豪華料理ではなく粗食です。が食べられて、寒さがしのげる家とお風呂があれば十分。それ以上を求めるのは贅沢だと思う。仙人みたいな考え方です。なみみさんの年

齡では早すぎます。でも、これが満たせない暮らしをしているヒトも多いですよね。つまり、今の暮らしが幸せなんだよ。この子も、わたしをあきらめてほしい。

サーバル 「あ、あきらめちゃだめだよ！ わたしについてきて！ おともだち、いっぱい、

いーっぱいいるから！」

サーバルは、焦つてうろたえながらも、笑顔をくれた。

やめて！ わたし、仲良く楽しくなんてできないんだよ！

なみみ 「そういうの、苦手……」 これは、なみみさんの悲鳴です。

本当に苦手なんだ。いじめられるよりも、仲良くするほうが難しいから。

あきらめさせるには、もっと強い言葉が必要かな……。

心の底で、ナイフを握りしめるような感覚があつた。抑えなきやだめだよ。わたし。

サーバル 「怖くないよ！ みんな、あなたをいじめたりしないから！」 サーバルちゃんは何も悪くないのですが、これは、地雷を踏むセリフでした。

.....。

なみみ 「押し付けないで……迷惑なの」
静かで怖い声が出てしまった。

サーバル 「！」

サーバルが、ぱつちりとした目をさらに丸くした。何が起きたのか理解できていない顔だった。

やつちやつた。

なみみ 「……重いの……友達は……」

サーバルはしばらく呆然としていた。まつ毛がふるえていた。こんなふうに拒絶されたことが無かつたのだろう。

シユワーツて頭の中に広がっていく白っぽい炭酸水と、沈殿していく黒っぽいドロドロ。

サーバルがうつむき加減になった。

わたしは彼女を正視できず、目をそらしてしまった。

サーバル 「……じゃあ、どうしてあなたはここに、パークに来たの

……」

普段の彼女からは考えられない、暗い声だった。

聞かないで……ブレーキが効くのも遅いんだよ。わたし。

なみみ 「しゃべらない動物が、好きだから」

それが、わたしの正直な気持ち。

わたしは、ヒトみたいなアニマルガールじやなくて、

“普通の動物

” が好きなんだよ。

サーバル 「……」

長い沈黙があつた。

…………わたし、なんてことを…………

気がつくと、サーバルがいなくなっていた。

灰色の不快な浮遊物が、頭の中に残つた。

つづく

第3話 「情けは己がため」

夜。寮のベッド。

わたしは、疲れで眠れなくて、布団のなかでぼーっとしていた。

灰色の記憶が、わたしの脳の裏側にこびりついていた。これは一生消えないものだ。この先、何度も思い出すのだろう。筆者は、過去の失敗の記憶（トラウマというほどではない嫌な記憶）が何かの拍子に浮かんで来ることが時々あります。後悔しても意味が無いのですが、繰り返し思い出すので、ずっと残ってしまっているんです。要らない事は覚えていて、大切な事は忘れてしまうのだから困ったものです。

わたしは、サーバルの無防備な心に、鋭利な言葉をグサつて刺して、追い打ちをかけて、傷口を広げて……『ごめんね、痛かつたよね……』。なんでわたし、サーバルに『ごめんなさい』って言えなかつたんだろう……気づくのが遅い。遅いにもほどがある。

思考が回り始めた。スイッチが入っちゃつたかも。

謝るどころか、わたしは傷ついたサーバルを見て喜んでいたんだ。

“やつてやつた”　“いい気味だ”　つて……。本当に最低。悪魔みたいだね、わたし。

あれは謝つても許されない言葉だ。わたしは、あの子の、自分ではどうにもできない事実……“アニマルガールだから”　友達になりたくないって拒絕したんだ。わたしは、それがどれほど痛いか知っているのに……　“自分がされて嫌なことを他人にしてはいけないつて、そんなの子供でも分かることだよ。

わたしはサーバルを拒絶したんじゃない。友達ができるのが嫌だったんだ　友達できるのは嫌、面倒、怖い、相手がかわいそう……理解不能な感覚ですよね。でも、なみみさんにとっては普通なのです。……そんなの言い訳にならないよ!!　あの子から見れば一緒にだよ!!

あの子は好意を向けてくれたのに、がんばつて手伝つてくれたの

に、わたしは恩を仇で……でも仕方ないじゃない。ひとりで居たいのは本当だもの……。我慢して付き合えば良かつたかな？　だめだ！そんな嘘失礼だよ！　もつとやわらかく断る言い方があつたでしょ！　じやあどう言えれば良かつたの？　それが分からないから、言えないと、わたしはいつもいつも、のけもの……。

『のけもの』？　違う!!　わたしが他人から逃げてるんでしょ!!

自分が悪いんでしょう!!

ああ……今夜は眠れないかも…………

ふつ……と、意識が途切れただ。

…………ぽこつ、と、泡のように、小中学校の頃の思い出が浮かんだ。

あれは、いじめとしては、かわいいものだった。

教科書が無くなったり、就学旅行で、寝てる間に髪を切られたり…………そういうのは、大して痛くなかった。でも、靴の中が温かいスープでびちよびちよになっていた時は泣きたくなつたな…………。

怪我するとか、お金を巻き上げられるみたいな犯罪レベルの事は無かつたし　上に書いたいじめも犯罪です。教科書を持ち去るのは窃盗、寝ている人の髪を切るのは傷害又は暴行、靴にスープを入れて使えなくなるのは器物損壊にあたります。全然かわいくないです。悪い噂を流されるような陰湿さも無かつた。わたしが鈍感だから気づかなかつたのかもしれないけれど。

いちばん嫌だつたのは……

体育の、チームで対戦する授業のあと、着替えの時間に『あなたのせいで負けたじやない！』って、毎回のようく詰め寄られたこと。これは事実だからつらかつた。がんばつて必死に動いても、『口ボツ

トみたい』つて笑われた。あの子たちは、わたしがチームに加わるのをひどく嫌がつた。どちらかと言えば、男の子の方がこんなふうに勝ちにこだわる気がします。小中学生男子は、プライドのかたまりですからね。おかげで球技が大嫌いになつたよ。なみみさんは、サッカー、野球、バレー、ボール……などを恨んでいるわけではありません。運動が苦手な子は、個人競技よりも、チームで対戦する種目の方が憂鬱な場合があるのです。ドッジボールなんて、いじめられる子にとつては悪夢です。

わたしは、いじめる子たちを徹底的に無視した。何を言われて黙つたまま。これはわたしの意地であり、せめてもの抵抗だつた。……逆効果だつたんだけどね。無視すればするほど怒るから。

中学の卒業間際、わたしをいじめたあの子から手紙をもらつた。卒業の記念品と一緒に、先生を経由して受け取つた。手紙を開封するまでに2年ほどかかりました。何が書かれているか怖くて。

『いじめてごめんなさい』……手紙には、そんなことが書かれていた。

予想通りだつた。先生に書かされただけでしょ？ つて、疑つてしまふ自分が嫌だつた。

直接言われなくて良かつた。こんなに謝らなくていいんだよ。わたしは恨んでなんかいない。思い出しても怒りは湧いてこない。そんな思い出もあつたなーつていうだけ。

それだけなんだけど……確かに、今の自分に影響している。性格とか考え方とか……。透き通つた灰色の何かが、心の深いところに沈んでいるんだ。

わたしは、やせ我慢が得意になつた。苦しいことからも楽しいことからも目をそらして、手遅れになつても気付かない。『やせ我慢が得意』なのは、精神的にも肉体的にもボロボロになつてしまう可能性が高く、非常に危険です。

こうなつたのは自分のせい。あのいじめは、わたしを形作った要素の一つに過ぎない。

再び、ほゝほゝほゝつ、と、灰色の記憶が、泡のように浮かんでき
た。

やめてっ!!
そんなの思い出したくない!!

嫌だ！　いやだ　いやあ

…………しつかり眠つてしまつた。

……頭が重い。ひどい夢を見ていた気がする。

外はまだ暗い。枕元の『普通の時計』を見た。お仕事だ。わたしにできることは、それだけ。

サーバル 「おはよー！ なみみさん！」

調理場にサーバルがいて、明るく元気に挨拶した。

なんで？ 予想はしてたけど……予想以上にゆるい。なんでこんなこ明るく、うれなの？

なみみ 「.....」

ああ！ 黙っちゃダメだよわたし！！ えっと、まず挨拶を！！

なみみ 「……おはよ……」

よかつた。言えた。昨日のこと謝らなきや。この子を傷つけない
言い方……

……だめだ……言葉が出ない。いつぱい考えたのに……。

サーバル 「お手伝いさせて！ なにすればいい!?」

やめてよ。わたし、ひとを動かすの苦手なんだつてば。

なみみ 「…………」

しまつた！ 謝る機を逃した！

サーバル 「あ……じやま、かな？」

サーバルが困つてるよ。何か返さないと。

邪魔じやないんだよ。上手く指示ができない？、教えるのが難しい

？

……どう言えばいいんだろう？

なみみ 「…………」

サーバル 「えつと、じゃあ、応援するよ！」

なに言つてるの、この子。

とりあえず、いつもの作業に入つた。
そんな、じーっと見られてるとやりにくいんだけど……。しかも笑
顔で。

なみみ 「……切るの、手伝つて」
とつても速くて上手だつたからね。

サーバル 「うーみやみやみやみやみやみやーーー!!」

やつぱりサーバルはすごかつた。爆速なだけじゃない。ちょっと
教えてたら、切る形や大きさも自由自在になつた。おんぼろスライサー
なんて比較にならないよ。

サーバル 「みやつ!？」

サーバルがビクツとして、切りかけのニンジンがまな板に落ちた。
なみみ 「みや？」

サーバル 「……手、切つちやつた……」

サーバルの親指の根本あたりから血が出ていた。傷は小さいけど、

痛そうだな……。サーバルちゃんの爪から発生する空気の刃で切られてしまいました。アニマルガールの皮膚は強いですが、自分の攻撃には耐えられなかつたようです。

なみみ 「ああ……消毒液と……ばんそうこうが……
ばんそうこうは、防水のものを常備している。

サーバル 「こんなのは舐めれば治るよ！」 唾液には殺菌効果があり、治りを早くするという説があります。逆に、舐めると雑菌が入るなどして傷が化膿するという考え方もあります。

多分、本当に治るのだろうけど……

なみみ 「ぬれると痛いから」

ここでは強力な洗剤を使うし、タマネギや柑橘類の汁が傷に入つたら目もあてられない。ネコにとってタマネギは毒ですが、アニマルガールは食べても問題ない気もします。毒ではなくても、傷に汁が入つたら、ヒトと同じように痛いはずです。

この子ドジっ子だけど、教えたことはがんばってやるし、失敗しても結果的に上手くいってる。不思議だ。わたしは教えるのが下手なのに……。

なみみ 「ここで、ちょっと休憩」

そんな暇無いけれど……なんというか、そうしたくなつた。

サーバル 「んみやあ……ねむひ……」

サーバルがわたしに寄り掛かつて、べつたりくつづいてきた。

熱い。ヒト化しても体温は高いんだね。

サーバル 「んみや……」

サーバルが腕をまわして……。

なみみ 「やめ……」

なんで抱きついてくるの!? 力つよいつて!!

わああ!! おでこスリスリするのやめて! マーキングです。

サーバル 「ぐるる、ぐるる……」

なみみ 「うくつ……」

喉鳴らしで神経をくすぐられちゃう! きもちい……。

サーバル 「ぐるる、ぐるる……ぐるみやー……んみやう……」

ろろ……」 原作のサーバルちゃんはあんまり喉を鳴らさないです
が、リアルサーバルは喉を鳴らすようです。

ネコが出す謎の音に、眠たげな鳴き声を混ぜたカクテル……ご
ちそうさまです…… イエネコは、喉鳴らし（ごろごろ）と鳴き声
が混ざった甘い声を出すことがありますね。『ぐるにやー』とか『ぶる
にやん』みたいな。あざといです。

……酔つちゃだめだよわたし！ これはこの子の作戦なんだ。絶
対に負けたりしない。

会話が苦手なら “別の方法” もある。この子、そういうの好き
みたいだね……。

よし！ ひさびさに本気出しちゃうよ！

—— 反 撃 開 始 ——

サーバルを、やさしく抱き寄せて、頭をなでた。最初は、やさしく
手ぐいで、スーツ…スーツ…つと指を滑らせる。髪の中の熱が心地よ
い。

サーバル 「え？ なみみさ……なにしてみやつ……」

次は、シャンプーするように くしゃくしゃと グルーミング。痛
いほど強くせず、くすぐつたいほど弱くない、気持ちいい力加減で頭
皮を刺激する。指の動きはランダムじゃなくて、毛の流れを意識した
パターンがあるんだ。指先を震わせながら、うねうねと波のように愛
撫する。

サーバル 「あつ、あつ……みやああ……」

限界までやさしく、けだるい声を出そう。ため息のように……

なみみ 「かゆういとこないですかあ？」 なみみさんは、低め
の声質と、ゆっくりでぼそぼそしたしゃべり方を “悪用” してい
ます。意外と色っぽい声なのです。

こういう時は、声かけも大切だからね。

サーバル 「え……えと……」

びつくりちやつたかな？ 少し目が泳いで、うるんできたよ。
この子の気持ちが、筋肉のふるえや呼吸で伝わってくる。言葉よりもずっと強く。

なみみ

「全身のちからを抜いてー……リラーックス……」

サーバル 「…………んふふつ…………ふみやー……」

かわいい声しちゃつて……しおらしくなってきたね。

次は、頭の上……耳の間やおでこを人差し指でこりこりする。

サーバル 「み……あふ……」

中指と親指も使おう。こりこり、ぐりぐりぐり……

けもの耳はとつても敏感でデリケートだから、やさしく、慎重に。

なみみ 「ほら、おみみ、きもちーきもちー……」

声かけと指をシンクロさせて、耳にやさしい振動をあげる。

わたしの、言葉にできない気持ち、精一杯、指先に込めて……。

サーバル 「みやんうう…………んみやあー……」

サーバルが脱力して、とろけ始めた。

ほっぺたを親指でマッサージ。押して、くるくるくる……軽くつまんで、むにむにむに……ふつくら、もちもちだね。

サーバル 「ぐるる、ぐるうみやー…………るる…………るる…………」

なみみ 「あごの下もいいよねえ？」

こしょこしょこしょ……指をしならせて、あごに沿って手前に滑らせるのがポイント。ちょっとぴり えつちな くすぐり方だよ。

サーバル 「ふへ、ふへええ……」

なみみ 「そんなによだれ出したらあ、おぼれちゃうよー？」

肩から背中を、ゆーっくり、もみん……もみん……もみん……ほぐさなくとも 柔らかいね。でも、しなやかで、すつごく強い筋肉。やつぱりネコだなあ……。

なみみ 「わたしの親指、じーっくり味わつてね……」

毛細血管を広げて、老廃物を押し流し、筋繊維の一本一本まで、ほろほろにほぐしちゃうよ。

サーバル 「…………み…………う…………」

サーバル、目を閉じて、しあわせそうな表情だ。

なみみ 「もう、声も出ないかなあー？」

でも、まだ寝かせてあげないよ。

箸休め的に、肉球マツサージいってみよう。いや肉球無いけどね。お手手 もみもみもみ……。

サーバル 「…………」

ネコの えつちなツボは、背中からしつぽの付け根あたり。服の上から刺激してみよう。

サーバル 「お、ほっ!!」

サーバルが、出ちやいけない声を出した。ここだ！ この子、感じやすいタイプみたい。

トントン叩くよりも、全部の指を使つくすぐる方が気持ちいいんだよね。

サーバル 「う……うみやああんう……」

今度は色っぽい声が出た。……スカートが邪魔だね！

……なに考へてるのわたし!! ダメだよ!!

わたしは、吸い込まれるようにサーバルのハイウエストスカートに手を入れ、もぞもぞしながら一番奥、腰まで差し込んで、さつき探り当てたツボを直接くすぐった。

なみみ 「ほれほれ……ここがいいんでしょー？」

うわあ……今、すつごい変態になつてるよ……わたし。

サーバル 「…………うみやふ！ ……んんつ！ ……にやうんみいはう！ ……みやふふつ……」

かーわいいいー……とろけてすぎてあぶない顔が最高……。

液状化したサーバルを休憩室のソファラーに寝かせて、ごはん作りを再開した。

チラツと『普通の時計』を見た。マグ先輩、また寝坊だね……。

……わたしは気づいていた。サーバルに作戦なんか無いんだって。とんでもない強敵だ。

つづく

第4話 「残酷なひざまくら」

2日後、ネコが2匹に増えてしまった。

サーバルが、お友達のカラカルを連れてきたのだ。そして、なぜかこの子も仕事を手伝うと言い出した。止めても無駄なことは分かつてから、手伝つてもらうことにした。

カラカル 「まぜまぜする棒なら、こっちの方がいいわ」
カラカルが、背伸びして、シンクの上の棚を調べていた。
この子は、サーバルより常識的なしつかり者だね。

と、思つたら……棚から袋が……

カラカル 「わ！ いやあ——！」

カラカルが、棚から落ちてきた白い粉をかぶつた。

……この子もドジっ子だつた。

カラカル 「けほつけほつ！ もう！ なによこれー！」

めでたい紅白猫 どちらかと言えば、オレンジ色ですが。カラカルは、アフリカーンス語では『ルーアイカット (Rooikat)』(ロイカットと表記する場合も)で、これは『赤い猫』という意味です。と化したカラカルが、大きな耳をパタパタ動かして粉を飛ばした。
あんな所に小麦粉があつたんだ……ドジっ子というか運が悪くて不憫だな……。サーバルは考えないで行動して失敗するけど、カラカルは考えすぎて余計なことをして失敗するタイプだね。

仕事を覚えるには、たくさん失敗すればいい。教える側に必要なのは、危ないことはさせないこと、質問にちゃんと答えること、上手くできたらたっぷり褒めること……わたしが苦手なことだ。ふたりは、そんな当たり前のことを教えてくれた。ふたりとも、失敗したら自分で反省して、次に活かしていく。そして恐ろしくポジティブ。だから、わたしが導くまでもなく成長していった。

それから彼女たちは、毎日のように……ではなく、気が向いた時にお手伝いに来てくれた。その行動は、なんとなく、パーク標準時にシ

ンクロしていた。でも天気予報よりハズレる。彼女たちの体内時計はみんな違うし、『お日さま』『ほかほか』『おなかすいた』

『ねむい』などが基準だから、どんな時計も合わないんだ。そもそも、けものに時計なんて必要ないよね。

つまり『ジャパリパーク標準時』は、固い時間で生きているヒトが、けもの の気持ちに戻るためのものなんだよ。

わたしは、気まぐれな時間に、両手に花……両手ににゃんこ状態で、死ぬほどゴロゴロなでなで……いや仕事だよ仕事！

資材の搬入では……

サーバル 「ほら！ こんなに持ち上げられるよ!!」

サーバルは、大きくて重い段ボール箱を、片腕で4箱ずつ、計8箱を軽々と持ち上げた。箱は大きさが違うのだけど、無茶な積み方でバランスを取っていた。

なみみ 「また落とさないでね……」

サーバル 「だいじよぶだいじよぶ！ よつ、と……」

サーバルは、箱が入り口に引っかかるないように腰を落とし、入り口を通ると再び上げた。普通のヒトがやつたら腰が壊れるだろう。

カラカル 「あたしは10個！」

ドライバー 「今ので終わりだ」

トラックの荷台 このトラックは冷蔵車です。 に乗っていたドライバーさんが言つた。

カラカル 「うええ!!」

台車なんていらないね。

ドライバーのおじさんが荷台から降りて、つぶやいた。
ドライバー 「相棒にひとり欲しい」

なみみ 「女の子といっしょに居たいんですね？」

わたしは、冗談めかしてそう言つた。いつもより、ちょっとだけ明るい声が出せた。

ドライバー 「いや……」

ドライバーのおじさんが、ふつと顔をそらした。なぜか照れている

ようだつた。

なみみ 「どうしたんですか？」

そして、わたしの顔を見て、表情をゆるめた。

ドライバー 「なみみさん、そんなかわいく笑えるんだな」

なみみ 「へ？ 失礼ですよ……」

笑顔見られちゃつた。恥ずかしい……。

わたしは変わつていない。たぶん戻つて来たんだ。幼い頃の自分が。

お風呂に浸かりながら、ふと思つた。
わたし、

ヒトにねこじやらしを振られるのは、嫌でたまらないけれど、
ネコにねこじやらしを振るのは、すつぐ楽しいんだよね。
それつて傲慢じやないかな？

ネコのかみさま、

こんなわたしを、ゆるしてください。

じゃあ、わたしが、

ネコにねこじやらしを振られたら、楽しいのかな？

早朝の休憩室。

なみみ 「えつと……ふたりに、お願ひがあるの……」

言つちやうの？

サーバル 「うん！ なんでも聞くよ！」

カラカル 「あたしにできることなら」

本当に言つちやうのね？

なみみ
—おしりを……呻いて……

サード&ガーティー
—みや?

小聲な声だけと
このふたりにはしてかり聞こえただらう

なみみ 「お尻を叩いてためなわたしを叱って……奮い立たせてほしいの」

サーバル
んみやーーー!!

ふたりともいい感じに引く

カラカル
「あんたなに言つて

それはわたしが訊きたいよ。

なみみ
「……………」

なにを血迷つたんだろう……わたし……。

カラカル 「しないわよそんな！」 おしりぺちぺち……なんて

カルカルはせよごひりツンテレなやま味を出していた

!

サー・バルは、いつも通り明るかつた。

カル 「そうよ、赤くなるまで……で！ そんなへんたい
じゃな、つよつ！一 赤、手形バ付、うやうやつです。

普通参考文

普通は考されは(?)カルは叩く側でサーノルが叩かれる側です。でもいつの間にか逆転していたら面白いかも。って、またアホな

こと考へてゐるな……。

このふたりが仲良しなのと、ノリツツコミが苦手なのが分かつた。わたしは気づいた。こういうのが友達なんだ、つて。

なみみ 「……ほんとに叩くんじやなくて……例えで言つたの」

サーバル 「なみみさんは、だめな子じやないよ！ すつぐくがんばつてるじやない」

カラカル 「わたしを叱つて！ なんて、なかなか言えないとアレだけど

「あれつてなあに？」

サーバル 「あれつてなあに？」

カラカル 「まあ、叱つてあげるのも、ともだちね」

サーバル 「なみみさんに、叱るところなんてないと思うけどな……」

カラカル 「あんたねえ……あんなひどいこと言われたのに、怒らないの？」

叱るところだらけだよね……わたし。

サーバル 「怒るとか叱るとかじやなくて……うーん……なんて言えぱいいのかな？」

難しいよね。わたしも分からぬよ。

カラカル 「ほら、アレよ」

カラカルが何かを思い出したみたい。

カラカル 「ともだちは、生まれたときから赤いなんかでつながつてゐ、とか……」

唐突だね。そんなのどこで聞いたんだろう？

サーバル 「なにそれ？」

この子たちに分かりやすく言うなら……。

なみみ 「赤い糸でつながつてるのは、つがいになる相手」

カラカル 「へ？」

なみみ 「小指と小指を結ぶ、見えない赤い糸。運命のひと」

元々の伝説では、結ばれているのは小指ではなく足首だったようです。

今時、そんなこと言う人いなければね。

サーバル 「すつゞーい!!」

カラカル 「あうう……」

カラカルが顔を赤くしてそっぽを向いた。かわいい。

サーバル 「でも、きっと、ともだちも初めからつながってるよ!」
この子にとつては、全ての けもの が友達候補なのだろう。だからに出会つて、ちょっと一緒に過ごせば友達。わたしが『友達いな』って言つた時、びっくりしたのも当然だね。

わたしはいつもクセで、ちらりと『普通の時計』を見た。
なみみ 「いけない……お仕事に戻らないと……」

サーバル 「…………」
カラカル 「…………」

ふたりが静かになつて、わたしを見つめた。本能的な恐怖でゾクツとした。

ふたりは、獲物を狙う肉食獣の目をしていた。

サーバルが、につこりと笑つた。

サーバル 「わかつた! なみみさん! おしりペチペチ してあげるよ!」

天使の笑顔だ。……わたし、地雷を踏んだっぽい。

サーバルがわたしの肩をつかんだ。

なみみ 「ほへ?」

彼女はそのまま座り込んだ。わたしは、肩を引っ張られてしまがんだ。

サーバル 「ほら! ここにおいて!」

あれれ? わたしは、半ば強制的に寝かされた。サーバルのふとももを枕にして。

カラカル 「ちよつとサーバル!! なにしてんのよ!」

サーバル 「なみみさんを、叱つてあげるんだ!」

サーバルの笑顔が怖かった。

たぶん、残酷な拷問
“ひざまくらの刑”
が始まるのだろう。

……絶対に負ける気しかしない。

わたしは、サー・バルに、やさしく甘く叱られた。

「おとせもがやれいかぐて……」
「おとせもがやれいかぐて……」
「おとせもがやれいかぐて……」

やさしい声が降ってきて、耳をこしょこしょくすぐつて……とろけ

「……お野菜、切らないとお、待つてるからあ……」

意図せずに色々い声になっています

カラカルが顔をのぞき込んできた。

カラカル
「ダメよ。休みなさい」

ふたりとも返すきで ものすごく美人だった

しもがんばるよ！」

それは不安しかないよ。

ましか 後月代には
夕先輩が三歳でくれました
もやみの人に

「……」
「疲れちゃつたかな？」 サーバル
「よくがんばつたね。いーこいー

じんわりあつたかい手で頭をなでなでされて、わたしは子供に戻ってしまう。不器用な指先からやさしい好意が伝わってくる。この前のおかえしなんだね。

「なみみきんはちからを抜くとすこーくかわいいん

サーバルのスカートから、甘酸っぱくて、ほんのりスパイシーなにおいがする。わたしは反射的にサーバルの腰に腕を回した。おいし

くてちよつぴりクさい、クセになるにおい……

サーバル 「んみやー……もつともつーと、甘えていいよ」

……そのにおいは、するするつと血液脳関門を突破して、わたしの頭の中を泳いでいく……。これは、けものが気持ちを伝える物質だ。

サーバル 「……ぐるぐる……ぐるる……ぐるる……」

頭蓋骨をふるわせるゴロゴロが、わたしのココロの周波数に重なつた。

純粹な好意が、神経細胞ニューロンのおしりをペチペチ叩いてる……」んの反則だよ……。

『ひざまくらの刑』 は、あまりにも過酷だつた。

フレンズには勝てなかつたよ……。

サーバル 「どうしてこんなことに……」

……こんな、ぐいぐいくるたのしさ……何年ぶりだろう……。

なみみ

「…………んふふつ……サーバルうー……」

わたしは、サーバルに抱きついて頬ずりした。泥酔なんてしてない、してないよ……。 濃厚なネコ分を吸いすぎたことによる

急性フレンズ中毒』 です。残念ながら手遅れです。

たまらずに、サーバルのしつぽを、くしゃくしゃもふもふした。

サーバル 「みやふふつ！ しつぽはだめだよ！」

ああ……かわいい……。

カラカル 「あーあ……やつちやつたわねえ、サーバル」

カラカルの、からかう声が聞こえた。

恥ずかしさは、気持ちを加速させる燃料だ。ブレーキ壊れちゃつたみたい。

なみみ 「んう……」

わたしは、暴走する想いにまかせて、サーバルを、ぎゅーっと抱きしめた。

サーバル 「わわ！ ちょっと、たすけてカラカル……」

『たすけて』と言いつつも、くすぐつたそうにするだけで逃げないんだ、この子。

友達って、作るものじゃないんだね。 いつの間にか、いつしょにいるんだ。

…………

サーバル 「なみみさん？」

やつと分かつた。いちばんのドジっ子は、わたしだったんだ。うれしかったこと、間違つてごみ箱に捨てちゃつて……。

鼻の奥がツーンつてなつた。

ごめん……ちよつと胸を貸してね。

なみみ 「むう……」

わたしは、サーバルの胸に顔をうずめた。

……ふわふわ熱くて、おいしいにおい……。

サーバル 「わわわ！ なみみさ！」

じゅわーっと熱くなつた。

なみみ 「…………くつ…………むううう…………」

歯を食いしばつたけど、涙がにじんだ。

サーバル 「なんで泣いてるのー！」

恥ずかしいよ……こんな、泣いちゃうなんて……。

カラカル 「ほら、がまんしないで、身をまかせなさい」

どうなるか怖かつたけれど、カラカルの言う通り、わき上がりつて来るものに身を任せた。

なみみ 「く！」

ぷつつ……と、最後の糸が切れた。ちょっとぴり痛い。

なみみ 「…………」

あれ？

なみみ 「 うわあああーーーああーっ!!!」

カラダがふるえる。

なみみ 「…………あああ…………あ、ありがつ……う、…………んううつ!
えぐつ……うう…………ぐす……」

ごちやごちやが水で流れて、頭の中、まつしろになっていく
…………

なみみ 「…………うああー…………ほつ、うう…………ぐしゅ…………くふつ
…………あ…………あ、あああ…………」

…………泣くつて、こんなに…………こんなに、気持ちよかつたんだ
…………。

まつしろな中、やさしく頭をなでられている感覚が、ず一つと続い
ていた。

カラカル 「」ういうとき、言葉は邪魔なのよね…………」

お
わ
り

あとがき・設定

あとがき

読んでいただきありがとうございます。

欲張つて詰め込みすぎましたね……なみみさんの頭の中のように、ごちやごちやです。

要点は三つくらいに絞ろうよ、と書いてから思いました。
あまりにも原作から離れていますが、こんな視点とテーマで書いた
けものフレンズの二次創作は他にないだろう、という変な自信はあ
ります。

書いているうちに、短編集『ジャパリ・フラグメンツ』に書いたへ
しづかなのけもの』とは、少し違うものになりました。裏表の関係
になっていますが、完全互換ではありません。

このおはなしを書き進めるうちに、『華やかなジャパリパークの
裏で、地味な仕事をしているヒトがたくさんいるのでは?』という
考えが生まれました。本物の動物園では、飼育員さんが様々な業務を
こなしていますが、ジャパリパークはあまりにも巨大なので、一人で
いくつもの業務を掛け持ちするのは無理だろうと筆者は思います。

料理人、トラックドライバー、清掃員、警備員、事務員、車両整備
士、土木建築関係者……そんな裏方のヒトたち。これらの仕事には知
識と技術が必要です。ジャパリパークの場合は、動物に関する知識も
必要ですし、建物も車両も特殊な設計のものが多いです。外部の業者
に委託するとお金がかかるので、パークには、なみみさんのような『動
物のお世話をしない飼育員』が必要なのです。驚くほど低賃金できつ
い仕事ですが、無料で利用できる寮があるので、それなりに生活でき
ます。なみみさんは考え方が特殊なので、それでも居心地が良い場所
なのです。(ジャパリパークは、世間一般から見ればホワイトな労働
環境です)

近い将来、こういった仕事はラッキービーストが行うようになり、たくさんのヒトが仕事を失います。その結果、ヒトがいなくなつても（不完全ながら）パークが機能し続けるわけです。

ただ、ラッキービーストがヒトの仕事を全部代行するのは無理だと思います。複雑な料理はできないようですし、あの体でどうやってバスのタイヤを交換するんだろう？などの疑問もあります。（車両整備は、自動化された工場や専用の装置があれば可能かも）やはり、ジャパリパークの運営には、舞台裏で働くたくさんのヒトが必要なんです。

そして、ジャパリパークの従業員の間でも、格差が生じている……。ヒトの世の縮図です。

なんだか、けものフレンズに似つかわしくない、生々しい話ですね。私はそんなもの書きたくないですし、読者もそんなもの求めていないと思います。でもそれでも書いちやうのが、くにむらせいじなのね（オオミミギツネ）。

なみみさんに感情移入する読者は少ないと思います。彼女は“サイレントマイノリティ”ですから。一人称の主人公には向いていないキャラクターだと思うのです。でも、“痛い本物のコミュ障”的内面を描くって、ちょっと珍しいかな？と思いつつ、こんな主人公にしました。内面と言動にギャップがあるのがポイントです。

大人しくて何もしゃべらず無反応な子は、感情や考えの表現が苦手（あるいは嫌い）なだけで、その裏には、激しい感情や複雑な考えが隠れている……こともあるようです。

しゃべらないのは“行動”であり、“性格”ではあります。なん。“何をされても怒らない”“楽しむことができない”といふのは大きな間違いです。

なみみさんが号泣しちゃうのは不自然かな？とも思いましたが、ここは理屈ではないのです。

大人が号泣するつて、現実には滅多にないですよね。（『号泣』は、“声をあげて泣くこと”です。テレビなどで号泣と言っているの

は、そこまで泣いていない事が多いです）

“自称コミュ障”の人は、大抵コミュ障ではないです。相手のことを考えて意思疎通ができるなら、コミュ障ではないと私は思います。意思疎通の方法は、言葉以外にもたくさんありますから、自分に合った方法を使えば良いのです（なみみさんのような特殊な方法は、使える相手や場面が少ないです）。ゆっくりでも不器用でも構わないのです。人に好かれようとか、人を好きになろうとか、無理をする必要はありません。思っていることを全部伝えるのも、相手の考えを全部理解するのも不可能なのですから。

設 定

【 なみみ 】

- ・ 年齢不詳（20代後半?）の女性。実年齢より若く見える。
- ・ 書類上の肩書は飼育員だが、実際は餌の調理が専門の職員。
- ・『20代前半で就職→現20代後半』、あるいは、『10代後半で就職→現20代中頃』。
- ・ 外見は地味。服は大抵ジャージか作業服。自分を着飾ることには全く興味がない。
- ・ スーツより作業服が好きなタイプのヒト。
- ・ 周囲のひとからは、暗くて無気力に見られる。ひとを寄せ付けない雰囲気もある。
- ・ クーデレではなく、もつと痛い本物のコミュ障。クラスにひとりくらい居るタイプ。
- ・ サイレントマイノリティ。
- ・ 周囲のひととは、自ら積極的に距離をとっている。
- ・ 話しかけられても黙っているのは、無視しているのではなく、どう返すか考えているから。

考え方言葉にして文章を組み立てるのに時間がかかる。考えて

いる間は、相手が話している

ことが頭に入らなくなる。よつて、会話の流れについて行けない。

・ コミュニケーション能力が極端に低いうえに、じっくり考えてからでないと動けないため、

チームで対戦する球技が非常に苦手。

・ 会話が終わって時間が経つてから、言えば良かつた、言わなきや良かつた、と後悔する。

これが会話への恐怖や慎重さにつながり、さらに会話が苦手になる悪循環に陥っている。

・ 上記の性質は、社会に出てかなり改善したが、やはり普通よりは会話が苦手である。

・ 小学校、中学校時代はいじめられていた。

・ „アニマルガールではない動物“が大好き。アニマルガールも、どちらかと言えば好き。

・ (ヒト以外の) 動物とふれあっている時だけ、やさしくゆるんだ顔を見せる。

・ 動物のお世話がしたくてジャパリパークに就職したが、研修が上手くこなせず、不本意な

„餌の調理“の仕事に就いた。だが、パークを支える仕事に誇りを持つようになつた。

・ 料理をするのは、どちらかと言えば嫌いであり、どちらかと言えば苦手。

・ 動物についてしっかりと勉強していて、職業柄、特に食べものや栄養に関して詳しい。

・ 本人はわりと今の仕事を楽しんでいる。

だが、きつい単調な仕事を黙々とやつていて、楽しんでいるようには見えない。

・ 勤務時間は、暗い早朝～昼過ぎまで。起床も就寝も早い。たまに昼間だけの勤務もある。

・ なみみが早朝出勤するのは餌やりの時間に合わせるためだが、

自身の仕事が遅いのを時間で

補つているためでもある。

・ そこそこ経験を積んでいるが、勤務歴の割に未熟な面がある。

成長が遅いのではなく、『上の立場になりたくない』のが本音。

・ 毎日早朝出勤ができる、動物の知識があるので、替えの効かない貴重な人材でもある。

・ アンイン第4炊事場の隣の寮で生活している。

・ 動物をなでまわしてマッサージするのが得意。ほとんどのけもの をとろけさせる程の腕前。

テクニックがあるだけではなく、指先のふるえ・声・におい・呼吸・心拍などにより、相手に

好意が伝わるので、異常に気持ちよく、えげつない癒し効果がある。

なみみ自身の感受性も高い。

これは、言葉による意思疎通が苦手なのをカバーするために目覚めた特殊能力。だが本人は

過小評価しており、周囲はその能力に気づいていない。仕事にも活かせず宝の持ち腐れ状態。

・ 友人、恋人、結婚、子供、仕事、お金……いろいろあきらめたら、すごく楽になった。

・ 『寝る場所とお風呂があつて、質素なごはんが毎日食べられれば十分幸せ』と考えている。

・ トラックドライバーさん のことがちょっと気になつてている様。

【 トラックドライバー 】

・ 見た目は冴えないおじさん。寡黙で渋い大人。顔はいまいちだが、背中が格好いい。

・ 飼育員ではなく、最初からトラックドライバーとして雇用された。

- ・ 体力があり、重量物を運ぶのが得意。
 - ・ 生きることに不器用なヒト。
 - ・ 主にアンインエリアの早朝便を担当していて、昼夜逆転に近い生活をしている。
 - ・ 『俺は夜行性だから大丈夫だ』が口癖。
 - ・ スケジュールは変動しており、第4炊事場に来ない日もある。稀に昼の便も担当する。
 - ・ 集配業務が無くても、倉庫の整理、清掃、車両の整備などを行つており、結構忙しい。
 - ・ 一度結婚と離婚をしており（生活スタイルが合わなかつたため現在（作中の時点）は独身。
 - ・ パークに来る前は、宅配業者で働いていたらしい。
 - ・ なみみさん のことがちょっと気になつてている模様。
- 【マグ先輩】
- ・ アンイン第4炊事場のヌシ的なベテラン飼育員。女性。
 - ・ 元は『マグロ先輩』と呼ばれていたが、短縮されて『マグ先輩』になつた。由来は不明。
 - ・ 明るい姉御肌。仕事には厳しい。なみみの師匠的な存在。
 - ・ 早起きが苦手で、しょっちゅう遅刻（早朝は時間外勤務だが）している。
 - ・ 遅刻の原因の一つは勤務時間が長すぎるためであり、彼女だけに非があるわけではない。
 - ・ 仕事の成長が遅いなみみを心配している。
 - ・ その半面、（自分にはできない）早朝勤務が毎日できる なみみを、高く評価してもらいる。
 - ・ 少し離れた場所から電動スクーターで通勤している。
 - ・ 彼女の作る料理は、豪快で大盛りで早くてうまい。特にチヤーハンが絶品。
 - ・ 経験と知識が豊富。昔は、動物の（直接的な）お世話をしていたらしい。

【 遅番のふたり 】

- ・若い凸凹コンビ。体力がある。性別の設定は無し。
- ・主に昼～夜までの勤務。清掃などで深夜に及ぶこともある。
- ・なみみが休むと徹夜から早朝までの勤務になってしまいます。
- ・なみみと同じ寮に住んでいる。

【 アンイン第4炊事場 】 通称 『妖怪キッチン』

- ・小さな食品加工工場のような施設。
- ・主な業務は2つ。
 - ☆ „アニマルガールではない動物“ 向けの餌を作る。生鮮食
品の加工など。こちらがメイン。
 - ☆ 従業員向けの食堂。社員食堂的なもの。余った食材を活用す
るために行っている。
- ・『妖怪キッチン』は、『地元の伝説』にちなむ、親しみを込めた
あだ名。
- ・『地元の伝説』というのは „森の奥深くに、妖怪が絵物語を描
く小屋があり、
　　入ると、その人の人生を絵物語のモデルにされてしまう“ とい
うもの。
- ・アンインの森の中にある。それなりにしつかりした道路が通っ
ていて。
- ・『大食堂』が併設されていたが、公式には閉鎖されたことになっ
ている。
- ・『大食堂』の設備は残つており、それが従業員向けの隠れ食堂と
して機能している。
- ・広さは小さめのファミレス並みだが、客は少なく閑散としてい
る。昼がピーク。
- ・ガイドブック等には掲載されていないため、パークの客（ゲス
ト）はほとんど訪れない。
- ・たまにアニマルガールの客も訪れる。

- ・ 食事は有料。従業員向けなので、パーク内のレストランよりもかなり安い。

・ アニマルガールのお客に対するては、持ち合わせが無ければ無料で食事を提供する事もある。

- ・ ここでの売り上げは、一応パークの売り上げ扱いになる。
- ・ ウォークインの大きな冷蔵庫と冷凍庫がある。
- ・ 夜間は機械警備。従業員はセキュリティ解除キーを持つている。

・ 隣に職員用の寮がある。しつかりした作りのアパートっぽい建物。通勤時間徒步1分。

- ・ 夏は蒸し暑く冬は厳寒な場所。雪も降る。
- ・ 水は近くの湧水をひいている。
- ・ かなり遠くにある地熱発電所から送電している。
- ・ 電気だけでは熱源が足りず、灯油やプロパンガス的なものを使っている。
- ・ 非常用として、薪を燃やす炉もある。これは古めかしいものではなく、近代的な装置である。

・ 似たような施設（炊事場・調理場・食品工場）はパーク内に数10か所あり、それぞれ

担当する範囲が決まっている。例：キヨウシユウ第3キッチン

・ 本作より後、ラツキービーストが本格的に運用されるようになると、ここは単なる倉庫と化し、ほとんどのヒトに忘れ去られてしまつた。なみみがどうなつたのかは謎。

【アンイン第3炊事場】通称『リストランテ』
・『リストランテ』の名は、『リストラ』に引っかけた皮肉。イタリア料理店ではない。

- ・ 見晴らしの良い丘の上にある。
- ・ アニマルガール向け食品と、アニマルガールではない動物向け食品の両方を作っている。

- ・ レストランとしては、割と繁盛している。明るい雰囲気。
- ・ 最小限の従業員しかおらず、アニマルガールに手伝つてもらつてなんとか運営できている。

※『アンイン第2炊事場』は欠番であり存在しない。『アンイン第1炊事場』は駅近物件。

【 集配システム 】

- ・ トラックで各所を回り、資材を配達し不用品を回収する仕組み。
- ・ 港の倉庫などに併設して、小規模なトラックターミナルがある。
- ・ 倉庫などは、パークの客（ゲスト）が立ち入らない場所にある。
- ・ 数台のトラックが同時に動いており、一台で担当する範囲が決まっている。作中の時代では、

経費節減のため一台で担当する範囲が広がりつつあり、ドライバーの負荷が増えてきている。

- ・ 早朝、昼、午後、夕方の4便が基本だが、全く走らない日もある。稀に臨時便もある。
- ・ あらかじめ必要な荷物をオーダーし、それをもとに時間とルートを決めて運行されている。
- ・ コスト削減のため、荷物が少ない場所には立ち寄らず、ルートをショートカットする。
- ・ ツアーバスのルートや時間に重ならないように動いている。
- ・ パークの客が通らない道を走っているため、客がトラックの姿を見るることは滅多に無い。
- ・ トラックは古くてボロい車両が多い。中には古いバスを改造したものもある。

【 業務用タブレット端末 】

- ・ 食品の受注、発注、勤怠管理、在庫管理などを行う。
- ・ 異常に頑丈。 トラックにひかれても、業務用食洗機で洗つても壊れない。

【 ジヤパリパーク標準時（の時計）】

- ・ 動物の生体リズムを基準にした時間を表示する時計。
- ・ 気温、湿度、気圧、日光の量などの影響を受けて盤面の色が変わり、針の速さも変動する。
- ・ 盤面は虹色の二重円で、目盛りや数字は無い。針は形の違うものが3本ある。
- ・ 針の回転方向は基本的に普通の時計と同じだが、たまに逆方向に回る。
- ・ 読み方は簡単だが、少しセンスとコツが要る。
- ・ 不正確な時刻を表示するように設計されているため、独特の“ゆらぎ”がある。
- ・ ほとんどのヒトは、その曖昧で気まぐれな（よう見える）表示になじめず、作中の時代のパーカ内では、あまり見かけない。
- ・ 専用のA.I.が内蔵されていると思われる。
- ・ この時計に意味は無く、あくまでも『不確定な時刻を表示する装置』である。
- ・ 設計者が行方不明になつており、アルゴリズムの詳細は不明。
- ・ 水晶（クオーツ）の代わりにサンドスターが使われているという噂がある。
- ・ 無用の長物であることに意味があるモノ。
- ・ 時刻を知らせるためではなく、整然とした時間からヒトを解放するために作られた。
- つまり、“パークにいる間は けもの の時間で生きよう”ということである。

おまけ（再掲）

／ 第2話と第3話の間のおはなし ／
夕方。

カラカル 「すゞいわあのひと。サーバルを怒らせるなんて」
広い食堂のような部屋の一角で、サーバルとカラカルが立ち話をしていた。

サーバル 「怒つてないよ！ すづく悲しくて……」

カラカル 「……あたしだつたら、ひっぱたいてるわ」

腕組みをしたカラカルが視線を向けた先……部屋の対角に、調理場の入り口があつた。

サーバル 「だめだよカラカル。なみみさん、おはなし得意じやないだけで、

やさしくて、すづくいいひとだよ？」

カラカル 「そうは見えないけど？」

サーバル 「なみみさん、朝早くにこはんの準備して、すづーくきれいに おそうじ

してるんだよ。みんな嫌がる大変なお仕事を、黙つてやるの」

カラカル 「たしかにね……。そういうところはすゞいわ」

サーバル 「でしょ！ それに、わたし見たよ！ なみみさん、動物に食べものあげるとき、

ところんとかわいい顔になるんだ！ きっと、とつてもやさしいひとだよ！」 ヒト以外にはやさしいのです。

カラカル 「……まあ、そんなに話してくれたのは、サーバルだからね」

サーバル 「ん？」

サーバルが、不思議そうに首をかしげた。

カラカル 「あんたはなにも考えてないから、話しやすいのよ」

カラカルは割と褒めています。サーバルちゃんは、『なにも考えてない』のではなく、『相手を否定せず、常にポジティブで自然体』なことから、異常に話しやすいのです。意外と、人生相談役やカウンセラーに向いているかも（“的確なアドバイス”をするのではなく、『聞い』てあげる”タイプ”）。

サーバル 「ひどいよー！」

カラカル 「……どうするの？ あのひと、セルリアンより強敵よ？」

サーバル 「敵じゃないよ。おともだちだよ！」

サーバルは、につこりと笑つた。

カラカル 「はあ……どうしてこの子は……」

サーバル 「たのしく遊ぶだけがともだちじゃないよ？」

カラカル 「そうね。むりしないのがいいんじやない？」 距離をお

いて付き合うのよ」

サーバル 「それはちょっとさみしいなあ……」

サーバルは、明るい苦笑いをした。

カラカル 「……で、作戦は？」

カラカルの目が、獲物を狩る肉食獣のものに変わつた。

サーバル 「おはなし得意じゃないなら、ちょっと離れたところから笑いかけて……」

カラカル 「じーーっと機をうかがつて……」

サーバル 「ちょっとずつ、じわじわ近づいて……」

カラカル 「相手が油断して……」

サーバル 「向こうから近づいてきたら、大チャンス！」

カラカル 「びゅーん!! つて飛びかかる！」

サーバル 「がぶーっ!! つて……食べないよっ!!」

カラカル 「案外、いいかんじの攻略法じゃない？」

カラカルが、いつもの感じに戻つた。

サーバル 「がしつ！ て 抱きついて すりすりしたら、めいわく、なんて言つてられないね！」

カラカル 「……ちかつぱ嫌われるわよ？」

『ちかつぱ』って博多弁だつたのか……。筆者は、単に『力いっぱい』の変形だと思つていました。

カラカルはちよつとあきれた感じで言つた。

サーバル 「そんなことないない！ はじめは嫌がるかもだけど

……いつかきつと……」

カラカル 「……落ちるわ」

カラカルが、ぼそつと言つた。

サーバル 「なんか、ネコになつたみたいで、わくわくしてきたよ！」